



絶版となって上昇気流に乗ったスポーツカー

日本市場では主に30代のマニア層に支えられて
その長いモデルライフをまっとうしたGTV。
ところが絶版となってからというもの、かなり様相が変わってきた。
40～50代の方が程度のいい中古車を求めるケースが増えているのだ。
そう、家族のためではなく自分だけのセカンドカーとして購入するわけである。
GTVは、“ひと仕事終えた”この年代の
クルマ好きの琴線に触れる何かを持っているのかもしれない。



ALFA ROMEO GTV



試乗車はGTVが最後に採用したパワーユニットとなった2ℓ直4ツインスパーク(150ps/6300rpm、18.4mkg/3800rpm)搭載。5段MTを介して前輪を駆動する。全長4295×全幅1780×全高1320mm。車重は1350kg。車両協力=コレツィオーネ世田谷店(04年式 アルファGTV 2.0TS 走行2.4万km 価格248万円) Tel.03-5758-7007

GTVは、日本においてアルファ・ロメオがまだメジャーな存在ではなかった時代の96年初頭に、兄弟車のスパイダーとともに上陸を開始した。ワルター・デ・シルヴァ率いるアルファ・デザイン・センターとピニンファリーナのコラボレートから生まれた個性的なボディに収まるパワーユニットには、新開発の2ℓ直4ツインスパーク/2ℓV6ターボ/3ℓV6が採用されている。このうち正規輸入を果たしたのは、2ℓV6ターボ(200ps/27.6mkg)だった。

97年6月には3ℓV6十左ハンドルで登場、約1年後のフェイスリフトで右ハンドルとなった。この右ハンドルモデルのトピックは、アクセルペダルとスロットルを結ぶ機械的なリンケージを廃し、電子制御式のスロットル・コントロールシステムが採用されたことだ。

そして、03年のマイナーチェンジで3.2ℓV6(240ps/29.4mkg)に換装、この時、フロントグリルの盾が拡大されるなど、内外装にも大きく手が入っている。1年後に2.0ℓツインスパーク(150ps/18.4mkg)モデルが追加設定された。

バリューな中古車価格

GTVはセダンに比べて輸入台数が少なく、中古車の流通量も豊富とは言えない。ただし、モデルライフが長かっただけに、程度のいい車両がけっこう買い得なプライスタグを付けてショップの店頭を飾ることもある。そこに目をつけた賢い方々が40～50代のクルマ好きである。家

族のためではなく、純粋にスポーツカーを楽しむためにセカンドカーとして購入しているのだ。だから、積極的にモディファイを施す人も多い。

相場は2ℓのV6ターボ:60～120万円、3ℓV6:120～250万円、2ℓツインスパーク:250万円～、3.2ℓV6:300万円～が目安。これくらいの価格帯なら、会社勤めの方々もお酒と煙草をちょっとだけひかえれば、毎月の支払いを無理なく自分のお財布から捻出できるのではないだろうか。ただし、故障が多く維持費のかかるクルマだと話にならない。その点もGTVは合格。マイナートラブルがないとは言いがたいが、エンジンやトランスミッション、水回りなどの機関部品は、意外と丈夫にできているのである。チェックポイントは、ワイパーレバー、パワーウィンドー・リフター、エアコンスイッチなどの電装系。気になるタイミングベルト交換は4年/4万kmが目安となる。ちなみに、最も流通量が多いのは、右ハンドルの3ℓV6を搭載するモデルだろう。

大人の秘密基地

イタ・フラ車専門ショップの“コレツィオーネ”から拝借した試乗車は、グリジオチアロというシルバーボディの04年式ツインスパークだ。走行2.4万kmで248万円のプライスボードが掲げられていた。後期モノのフロントグリルは迫力満点! インテリアの高級感も高いから、クルマに疎い人は、まさか200万円台で買えるなんて思

うまい。佇まいにはポルシェ911並みのオーラを感じる。さすが最後期型だけあって“伊達感”も完成形だ。

エンジンの回転フィールはちょっと威勢のいい147と思っている。同じパワーユニットを搭載しているから、スペックもまったく変わらない。ただし、高回転域でのエグゾーストノートやビート感にスポーツカーらしい演出が施されていて、高速道路やワインディングロードではほどよい高揚感を与えてくれる。ご存じのように、もともとツインスパークは実用一辺倒の退屈なユニットではないのだ。ストロークはやや長いものの、カッチリとした感触を持つシフトレバーをテンポよく操れば一般道でも充分楽しめる。ツインスパークを“アルファらしく”走らせるコツは、高回転まできっちり回してあげること。それさえ忘れなければ、心躍る種類のクルマであることは間違いない。

このアルファ製スポーツカーは、僕らが子供の頃に野山で作った秘密基地と同じなのかもしれない。必須項目はコンパクトでカッコいいこと、そしてあまりお金をかけないことだった。だから、最近のおじさんたちはGTVなのだ。価格、動力性能、スタイリングなどが、自分サイズでちょうどいいのである。いまにして思うと、あの秘密基地が親離れの第一歩だった。するとGTVは、子離れの第一歩ということか……。それに40代も半ばを超えると、ひとりになりたい時が増えてくるでしょうから……。

Text: 野田義彦/Photo: 丸山博人